

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884014

研究課題名(和文)ロシア語母語話者による日本語音声習得 教材開発と音声習得理論の構築を目指して

研究課題名(英文) Acquisition of Japanese Phonology by Russian Native Speakers: for the development of teaching materials and theory construction

研究代表者

小熊 利江 (OGUMA, Rie)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：00448838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ロシア語母語話者による日本語の自然発話音声について分析を行う。平成25年に対象とした同一の被験者に、2年後の平成27年に再び日本語能力と発話音声を観察する縦断調査を行った。本研究は新規の分野であり、収集された日本語能力測定結果および産出音声データ自体が貴重な資料である。分析の結果、以下のことが明らかになった。

- 1) モスクワで日本語を専攻する学習者の日本語能力は、1年間という短期間の学習で初級レベルから中級レベルに向上する様子が見られた。
- 2) 学習者の日本語能力が中級レベルに到達した後、モスクワのような外国語学習環境では学習者の日本語能力レベルの向上が緩やかになる様子が観察された。

研究成果の概要(英文)：This study examines the acquisition of Japanese phonology by Russian native speakers. To assure the quality of the study, both cross-sectional data and longitudinal data were used. The data consists of Japanese language test results and spontaneous speech of Russian learners of Japanese. This study explores a totally new research field, and thus the data itself is highly valuable. The results revealed:

- 1) The Japanese language of Russian learners who major in Japanese at a university in Moscow had improved from a zero beginner's level to an intermediate level within a year, a very short period of time.
- 2) After attaining an intermediate level, the learners seemed to slow down improvement. This might have been caused by a learning environment where Japanese is learned as a foreign language.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教育学 第二言語習得 ロシア語母語話者 日本語能力レベル 日本語音声 自然発話

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二言語としての日本語音声習得研究

外国語によるコミュニケーション能力がますます重要になるなか、近年、言語学において第二言語習得研究は非常に注目されている分野である。また、以前より外国語学習では、会話や聴解など音声によるコミュニケーション能力が、学習者にニーズの高い項目として挙げられている。しかし、文法や語彙、読解や作文など書面で行える研究に比べ、「話す・聞く」技能に関する研究は大きく後れをとっている。第二言語としての日本語教育の分野においても、発音や聞き取り能力の向上に対する学習者のニーズが高いが、音声指導教材は他の分野に比べると無いに等しい。

その原因として、日本語の音声習得研究が進んでいないことが挙げられる。コンピュータの普及と音声分析ソフトの開発に伴い、英語や中国語などを母語とする日本語音声習得研究が徐々に行われるようになったが、その他の言語を母語とする学習者に関する研究は非常に限られている。基本的に、対象とする母語話者の音声データが少ないのが現状で、日本語音声習得に関する理論構築を行うことも困難な状態である。

(2) ロシア語母語話者の日本語音声の習得研究

外国語学習において、音声コミュニケーション能力の習得は学習者のニーズが高いにもかかわらず、日本語音声習得研究は大きく後れている。日本語教育に200年以上の長い歴史を持つロシアにあっても、ロシア語母語話者の日本語音声の研究は限定的である。日本においてもロシアにおいても、ロシア語母語話者の日本語音声習得の研究は、これまでほとんど行われてこなかった分野である。

ロシア語母語話者の日本語の発音の特徴については、助川(1993)が行った調査があ

る。だが、記されているのは、ロシア語研究者1人による内省からの評価であり、実際の音声を分析したものではない。助川の調査をもとに、渡辺(2011)も同様にロシア語圏の日本語教師の内省による評価研究を行っている。また、戸田(2006)の研究では、ロシア語母語話者19人に、自分の日本語の発音の問題点を自由記述させる調査を行っている。これらは、教師や学習者の内省をもとに問題点を示したものであり、この結果を実際の音声データを用いて実証的に明らかにする必要がある。このように、ロシア語母語話者の音声習得に焦点をあてた研究は極めて少なく、参照する研究成果さえ不足している状態である。

(3) ロシアにおける日本語音声教育

仲矢・稲垣(2005)によると、ロシアの外国語教育方法の特徴は、「文法対訳法と徹底した暗記練習と翻訳練習を中心とする教授法」とされる。さらに、ロシア・NIS諸国の日本語教師の不得意分野として、「アクセント・イントネーション」の指導が第一に挙げられている。それに続き、第2位「表記(漢字)」、第3位「音声」となっている。一方、渡辺(2011)の研究では、ロシア語圏の日本語教師には音声指導を行うための十分な知識がなく、学習者からの発音改善の要求に全く応えられていないと記されている。実際、研究代表者は平成26年3月までモスクワの大学に勤務していたが、大学教員であっても自身が日本語音声教育を受けた経験がないために、学生にも音声教育を行えないという状況を現地で見聞した。

現在、ロシアでは全般に体系的な日本語音声教育がなされていない状況であると言える。そのため、教師が音声指導を行う際に理論的な支えとなり、日本語の音声指導教材の開発にも寄与できる研究を行うことは急務である。研究代表者は、これまで英語・中国

語・韓国語母語話者を対象とした日本語音声習得研究に従事してきた（小熊 2000, 2002, 2007 他）。このようなロシアの日本語音声教育の現状を改善するため、本研究ではロシア語母語話者を対象にした日本語の音声習得研究を行うことにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ロシア語母語話者による日本語音声の習得過程および習得上の困難点や難易について明らかにし、音声教育に役立てることである。また、現在まで行われてこなかったロシア語を母語とする日本語学習者の日本語発話の基礎的な音声データを収集することも目的の一つである。具体的には、以下の3点を研究目的とする。

- (1) ロシア語を母語とする日本語学習者によって産出された日本語の自然発話音声を集め、学習者の日本語能力レベルごとに分類する。
- (2) ロシア語母語話者の日本語音声について、日本語能力レベル別に分析を行い、音声習得過程の予測を行う。
- (3) 上記の音声習得過程の予測について、時間を追って同一学習者の観察を行う縦断研究によって検証する。

本研究は、先行研究のほとんどない未開拓の分野の研究である。本研究にて収集される音声データ自体が非常に貴重なものであるとともに、本研究の成果が日本語学習教材の開発、さらに第二言語習得研究の理論構築に大きく寄与できると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 横断研究と縦断研究の併用

第二言語習得研究のデータは、同じような言語背景の複数の学習者を一つのグループにして習得過程を予測する横断的な手法、および同一学習者について一定の期間の習得過程を観察する縦断的な手法によって収集

されることが多い。本来、習得過程を解明するには縦断的な調査が不可欠だが、同じ学習者を長期に調査対象とすることは困難であり、それを補う目的で横断的な手法を用いた研究が多く行われている。本研究では、横断研究と縦断研究の手法を併用して、ロシア人日本語学習者の音声習得の実態を把握することを目指した。

研究代表者は、迫田代表者による平成24-27年度科学研究費助成事業『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—』の海外研究協力者として、平成25年にロシア語母語話者による日本語発話のデータ収集に協力した。その際、被験者52人の日本語発話の収録を行うことができた（迫田2014, 小熊2014）。現在、この音声データのコーパス化が一部行われている。

本研究では、上記の研究において平成25年にデータ収集した同一のロシア語母語話者を被験者として、約2年後にあたる平成27年に、彼らの音声習得状況について縦断的な調査を行った。調査では、対象となる約29人分の音声データの収録を目標としたが、最終的に24人のデータ収集を行うことができた。日本語音声習得研究の縦断的手法において、被験者24人というのは、例を見ないほど大規模な研究である。しかも、ロシア語母語話者に関する縦断的な日本語音声データは、管見の及ぶ限り見られない。

(2) データ収集の方法

前回の調査から約2年後の平成27年に、研究代表者と発話データ収集協力者がモスクワに出向き、前回と同一被験者であるロシア語母語話者24人を対象に調査を行った。モスクワの大学に所属する教員の協力を得て、データ収集の会場や被験者の面接スケジュール等の手配を行った。ロシア語母語話者24人に対して、日本語能力測定テストを行っ

たうえで、日本語の自然発話の音声を収録した。被験者の日本語学習背景を把握するために、フェイスシートによる学習者情報に関する記述式調査も行った。

被験者の日本語能力測定に用いたテストは、筑波大学留学生センターによって開発された SPOT90 と J-CAT の 2 つである。2 つのテストはコンピュータ上で受験することができ、試験は当日会場にてオンラインで行われた。

日本語発話の音声データ収集の際は、被験者とインタビュアーである協力者が静かな部屋に入り、一対一で約 1 時間の面接を行った音声を収録した。音声データ収集のために行われた発話活動の内容は、4 コマ漫画を用いた 2 件のストーリーテリング、約 12 の話題に関する質問への応答、2 件のロールプレイである。

(3) データの分析方法

平成 27 年度には、主に収集した音声データのコンピュータへの入力と文字化作業を行った。音響分析ソフトを用いて音声データの編集を行い、日本語音声研究を専門とする研究者に依頼し音声データの文字化の作業を行った。膨大な量の音声データであるため、文字化作業に多大な時間を要した。その上で、音声データを編集し、日本語母語話者であり日本語音声について知識のある日本語教師に依頼し、音声データを聴覚的に評価する作業を進めた。

また、同時に収集した日本語能力測定テストについても、測定結果を分析し各学習者の日本語レベルの判定を行った。判定の際には、収集したフェイスシートの内容も用いた。

4. 研究成果

(1) ロシア語母語話者による日本語の音声

ロシア語母語話者によって産出された日本語音声について、日本語レベル別の横断調

査を行い、さらに同一被験者について 2 年後に再び日本語能力と日本語音声の産出状況を観察する縦断調査を行った。本研究は全く新規の分野の研究であり、縦断調査によって収集された日本語能力測定結果、およびロシア語母語話者によって産出された日本語音声自体が貴重な資料である。

今後、本音声データをもとに、第二言語習得研究の分野において、ロシア語母語話者による日本語音声習得の研究の発展が期待される。希少なロシア語母語話者のデータが新たに加わることにより、日本語音声習得研究における様々な仮説を検証することが可能になる。その結果、日本語音声習得研究を前進させる可能性と、応用言語学の分野に大きく貢献することが期待される。

(2) データ分析の結果

収集したデータを分析した結果、主に以下の 2 点が明らかになった。

モスクワで日本語を専攻する学習者の日本語能力は、1 年間という比較的短い学習期間で初級レベルから中級レベルに向上する様子が見られた。

学習者の日本語能力が中級レベルに達した後、学習者の日本語能力レベルの向上が緩やかになる様子が観察された。

日本語学習歴のないロシア語母語話者が、大学の専攻として日本語を学習した場合、モスクワのような外国語学習環境においても 1 年未満という短い期間で中級レベルに到達できることが明らかになった。また、2013 年と 2015 年の調査に参加した学習者 24 人の 2 回の結果を比較した結果、2 年の間に全般的に日本語能力レベルが向上している様子が見られた。ただ、調査対象とした学習者を個別に見てみると、日本語学習の開始後 1 年で全ての学習者が中級レベルに到達したのに対して、中級レベル以降では全ての学習者の日本語能力が向上していたわけではなかつ

た。多くの学習者が中級レベル以上になると、日本語能力向上の速度が比較的ゆるやかになる様子が見られた。

したがって、海外の外国語学習環境にあるロシア語母語話者が、日本語能力ゼロ初級レベルから中級レベルに進む速度は1年未満であり比較的速いが、中級レベル以上の向上速度は緩やかである可能性があることが、研究により示唆された。これまでロシア語母語話者の日本語習得に関する実証研究はほとんど行われていないため、日本語習得について部分的にも明らかにできたことは研究史上において意義深い。

本音声データの分析は現在も進行中であり、さらに興味深い考察が期待できる。本研究は、ロシア語母語話者に関する日本語音声習得研究の端緒として位置付けられる。今後、音声データについてさらに分析を進め、学習者の日本語能力レベルごとの音声習得の状況、ならびに音声習得上の困難点などを明らかにしていきたい。実証的な縦断研究によって、ロシア語母語話者の日本語音声習得過程が明らかになることが見込まれる。さらに、ロシア語母語話者による音声習得過程の分析を進めるため、引き続き平成28年度にも、モスクワにて同一被験者の縦断的な音声データを収集する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小熊利江(2016)「ロシア語母語話者の日本語音声に関する習得研究 - モスクワ調査の概要と日本語能力レベルに関する考察 - 』日本語教育連絡会議論文集』Vol. 28, 12-18, 査読なし, 日本語教育連絡会議

小熊利江(2014)「ロシア調査」『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—

研究と構築の有機的な繋がりに基づいて— 中間報告書』111-112, 査読なし, 科学研究費助成事業(基盤研究 A, 課題番号24251010) 研究者代表: 迫田久美子, 研究成果報告書

[学会発表](計1件)

小熊利江(2015)「ロシア語母語話者による日本語音声の習得研究」日本語教育連絡会議 第28回会議, ザグレブ大学(クロアチア・ザグレブ), 2015.08.24.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小熊 利江 (OGUMA, Rie)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 00448838